

【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、看護師による高齢者の死の予見について記述し理解を深め、看取りについての看護実践の質向上への示唆を得ることを目的としている。この目的を達成するために研究Ⅰでは、概念分析を用いて看護師における「死の予見」概念の4つの構成要素を明らかにし、定義をした。研究Ⅱでは、特別養護老人ホームに勤務する看護師による高齢者の死を察知した症状および変化、高齢者の死を察知した後の看護師の具体的な行動、看護師の死の予見と高齢者の実際の死亡時期の評価、さらに看護師の死の予見を可能としている心構えや行動力について質的記述的研究方法を用いて記述している。

本研究の新奇性は、看護師における「死の予見」の定義として「患者の身体症状の変化や精神心理的な変化を観察して死を察知し、死の時期を判断すること」とした点が挙げられる。高齢者の死の予見に際して、身体的心理的な症状や変化といった死の前兆や兆候を観察すること、さらに死の時期を判断することの重要性を示したといえる。また、研究参加者全員が約1か月前に高齢者の死を予見した経験を有することを示したことは予見の時期と高齢者にとって最善の看取りの在り方を考えるうえで重要な可能性を示唆している。看護師が、約1か月前に高齢者の死の予見する症状や変化として9カテゴリーが見出されたが、その中で「高齢者が訴える死の恐怖」、「目の変化」、「形相の変化」、「声の変容」、「他覚症状の出現」は、本研究で新たに見出されたカテゴリーである。また、本研究では、看護師は高齢者の死を察知したのち自らがより良い看取りへ向けた体制整備のために5つの行動をしていることが示された。「家族に看取りについて説明する」、「看護師間、他職種間で情報共有する」、「医師への往診依頼をする」などの行動は、高齢者の看取りにおいては、詳細な症状や変化の観察のみではなく、具体的な組織的な体制整備を行って初めて質の高い看護実践が可能となることを示唆するものである。さらに、高齢者の症状や変化を察知する詳細で繊細な観察やより良い看取りへとつなげる行動力の背景には、「特養で看取するという心構え」「看護師主導で看取するという自覚と行動力」「看取りを特別視しないこと」「入居者（高齢者）を尊ぶ気持ち」、「施設で穏やかに死を迎えてもらいたい願望」があり、看護者としての在り様が示されている。

研究方法については、特別養護老人ホームに勤務する20名の参加者は目的標本抽出法で選ばれ、女性は19名であった。半構成面接法を用いたインタビューデータは、Miles, Huberman, and Saldana(2014)らの分析方法で段階的に丁寧に分析されていると高く評価できる。研究方法における新たな試みとしては、看護師による予見と高齢者の実際の死亡時期を比較し評価した点、また看護師が主観的に語った高齢者の症状や変化について研究者が参加観察法を用いて実際に評価した点が挙げられ、データ分析の妥当性を高めている点も評価に値すると考える。

本研究は、量的研究では明らかにし得ない看護師による死の予見、特に死を察知する症状や変化について詳細に記述しており、その内容は、今後高齢者施設や地域で看護ケアに従事する看護師の実践の質向上に寄与するといえる。また、経験の浅い看護師や看取りに

博士学位論文審査の要旨

関する経験知の少ない看護師でも、高齢者の死を察知する症状や変化について理解し、適切な時期に適切な看護介入を行うことを可能とすることが期待できる。さらに研究結果は、高齢者の看取りに関するアセスメントの視点および適切な看護介入方法と介入時期、看取りに従事する看護者の在り様や看取りの体制整備の在り方を開発整備する手がかりとして看護実践および研究、教育の質向上に貢献するものといえる。

審査会では、研究目的の表現の選び方、対象施設の組織や文化特性と研究結果との関係、**Sampling** 方法、分析方法（**Conceptually Clustered Matrix** 等の方法を用いた根拠と理論的背景、起源と特徴、カテゴリー表現の一貫性と妥当性等）、考察で提示された図の作成方法、実践への貢献、今後の研究の方向性等について問われた。申請者からは、それぞれの質問に対して論理的で概ね妥当な回答が得られた。今後の課題についても真摯に受け止め、積極的に対応する姿勢がみられた。

以上により、本申請論文は博士学位論文に値し、申請者は博士（看護学）の学位に相当する学識と研究能力を有するものと判断する。